平成30年（2018）
阿づまの光
7月号・Julio
大本東京本部
開設50周年

教主さまお作 灰釉茶盌 銘「天の川」

【宮原山土　本宮山松釉】

月日のお恵みに感謝をささげ

東京宣教センター長　猪子　恒

今、東京宣教センターのプランター野菜が、勢いよく育ち、たくさんの花をつけています。ミニトマト、ピーマン、トウガラシ、ナス、キュウリの定番を植えたのは5月14日。毎年もっと早く作業を開始したいと思いつつ、今年もゴールデンウィークを過ぎてしまいました。月次祭の前々日、「これ以上は…」と、雨が乾ききらないお土を裏庭に広げました。みんなで協力してブルーシートにお土をひろげ、石灰や肥料を混ぜて切り返し。月次祭を終えて、ようやく定植しました。

お互いに連携、協働して、作業が進められたからでしょうか、特にキュウリとミニトマトが、グングン伸びてきました。先日は、少し曲がっていますが、20センチ余りに育った立派な「初もの」を、ご神前にお供え、夕食で味噌と一緒に賞味もさせていただきました。

教主さまは、先の大祭ごあいさつの中で、お月さま、太陰暦におふれになり「旧暦に従って種をまき、苗を植えたり収穫したりと、万事にわたって月日の神さまのご守護をいただき、大自然とともに調和していくありかたを基本としていかなければ、本当の歓びは得られないのではないかと思います」、「月日のお恵みに感謝をささげ、常に陰陽の調和した旧暦を意識して」とお示しくださいました。

慌てて苗を定植した日を、旧暦で確認してみました。その日は旧3月29日でした。

そして「月齢と農」に関連するホームページを調べてみると、『新月から5日までに、種まきや定植をするといい』と複数のサイトに書いてあります。「そうか、一番いい時に定植ができたんだ」「これからはキチンと調べておこう」と思いました。

先日は、季節外れの台風が通過しました。前日には小雨の中、支柱をしっかりと立て、苗をくくりました。確かに人のお世話でよく育つわけですが、すくすく育つ野菜から私たち人間が教えられることもたくさんあります。結局、どちらも育てられているのです。大自然は、本当に有難いとつくづく思いました。

題字出口直日
通巻第592号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

あらがねの土（つち）は万有産出（ばんいうさんしゅつ）の
基（もとゐ）なりせばおろそかにすな

出口王仁三郎聖師

王仁三郎の半生と高熊山修行

～入山120年をしのぶ～

出口王仁三郎聖師は明治４（1871）年、京都府亀岡市に生誕。12 歳で代用教員を務めるなど多感な青年期を過ごしました。明治 31 年、郷里の高熊山で１週間の修行を行い、神秘的な体験を経て宗教的使命を自覚。王仁三郎の半生を振り返り、その転機から学びます。

今年は、出口王仁三郎聖師が、明治31年旧2月9日、郷里の霊山・高熊山で一週間の修行をしてから１２０年の節目を迎えます。

王仁三郎聖師の全体像はとても一言では語りつくせません。例えば、大正13年、世界平和の実現を目指してモンゴルを訪問したり、また「万教同根」を提唱して「人類愛善会」を組織。さらに「芸術は宗教の母」と唱えて芸術活動を盛んに行い、三千個余りの楽焼「耀盌（ようわん）」や何万点にもおよぶ書画、数十万首とも言われる短歌など、信じられないほどの膨大な作品を残しています。ご存知の『霊界物語』は全83冊。とてつもない数です。

その基盤ともなった青少年時代をどのように過ごしたのでしょう。

タダアイ事件

王仁三郎は明治４年旧7月12日、現在の京都府亀岡市曽我部町穴太で、貧しい農家の長男として誕生しました。本名は上田喜三郎（以下、喜三郎）です。

上田家はもともと藤原姓を名乗り、穴太では名の通った家柄でしたが、喜三郎が生まれるころには、6畳、4畳、3畳のあばら家と、わずか一畝の田んぼしか残っていませんでした。

病気が原因で3年遅れで入学した小学校でも、ずば抜けた学力でトントン拍子に進級。ある時には、大人たちが読めない新聞をスラスラと読んで聞かせたり、井戸の水脈を的確に言い当てるなど、村の人々から「神童」「地獄耳」などと呼ばれました。

ある日の授業で教師が「大岡越前守忠相」の「忠相」を「タダアイ」と読みました。そこで喜三郎が「それはタダスケです」と訂正したところ、教師は烈火のごとく怒り出し、体罰を加えようとしました。追うは逃げるはの大騒動となり、校長先生が慌てて仲裁に入り、「タダスケ」が正しいと指摘し落着しました。が、メンツを潰された教師の気持ちは収まりません。

それ以後、喜三郎を徹底的にいじめます。さすがの喜三郎も我慢の限界となり、とうとう教師に仕返しをします。これにより、喜三郎は退学、教師も免職となりました。

ところが、その後、校長先生の計らいで、欠員となった教員の穴埋めのために、喜三郎は代用教員として抜擢。わずか12歳の「豆先生」の誕生でした。

結局、代用教員は1年あまり務め、その後は、父親の農作業を助ける傍ら、醤油売りや、斉藤源治という豪農の家で秘書を務めたりしながら、家計を助けました。

時には薪を荷車につんで老ノ坂峠を越え、父親と二人で京都の街に売りに出かけました。往復50キロ余りの道のりを、1日2往復することもあったそうです。

しかし、働けど働けど、貧しい生活は何も変わりません。多感な青年期を、貧困との戦いに費やさなければならない喜三郎でした。

父の昇天

23歳のころに獣医学を学び、その経験を活かして、「穴太精乳館　上田牧場」を開業。牛の飼育から搾乳、販売、経営まですべて一人でこなしました。

仕事も軌道に乗り始めた矢先、大きな悲しみが待っていました。それは、父・吉松の他界でした。53歳でした。

喜三郎は、仕事の合間をぬって父親を介護し、近くの教会や神社で必死に祈願を続けましたが、願いはかないませんでした。

貧乏のどん底で正直一途に家族を養い、泥にまみれながら人間らしい生活を一度も味わうことのなかった父。自分も長男として、早く父に楽な暮らしをさせたいと願っていたことでしょう。結局それも叶えられず、喜三郎の心にはポッカリと穴が空いてしまいました。

穴太の盆地で牛を買いながら、ふと父の墓標のある西山を見れば、涙が流れて止まりませんでした。その悲しさはやがて、社会の矛盾に対する怒りへと変じ、いつしか無神論者になっていきました。

悔悟の念

「弱きを助け強きをくじく」と言っては、弱い者いじめを見つけると、わざわざ喧嘩を吹きかけて助けるということをしました。喧嘩はめっぽう強く、侠客をも相手にするようになりました。

しかし、弱い者を助けて強い者をくじくといっても、くじかれたほうはたまったものではありません。段々と恨みを買うようになります。

明治31年旧2月8日、浄瑠璃の温習会に出演していた喜三郎のもとに、日ご

～21世紀・生きがい講座～

橋本 伸作（はしもと しんさく）（大本東京宣教センター次長）

ろ恨みを持っていた数人が突如なぐり込み、喜三郎を連れ出して袋だたきにしました。

半死半生の状態になった喜三郎のもとに、祖母の宇能さんと、母のよねさんが駆けつけてきました。わが子の変わり果てた姿にうろたえるばかりの母・よねさん。一方、祖母の宇能さんは毅然として喜三郎にこんこんと説き諭しました。

「お前はこの世に神さまは無いとか、哲学どうのと空理窟ばかり言って、もったいない。ご無礼をした報いが今来たのであろう。ゆうべのことは全く神さまのお慈悲の鞭をお前にくだして、高い鼻を折ってくださったのだ。お前の父はあの世から、その行いを見て、行くところへもよう行かず、魂は宙に迷うておるであらう程に、これから心を入れ変えて、誠の人間になっておくれ」

体は傷つき身動きのできなかった喜三郎でしたが、祖母の言葉に何度も頭をさげて、悔悟の念にくれました。

やがて意識がもうろうとする中、洋服を着た紳士が近づいてきました。そして「お前を富士山へ連れて行く」と言われます。夢かうつつか、喜三郎はその言葉に従って着いて行くと、体は空をとんでいるような感覚になりました。

翌朝、われに帰ると、富士山に到着したと思ったその場所は、自宅から2キロほど離れた高熊山の岩窟でした。

高熊山での悟り

高熊山は、上古、開化天皇を祀った延喜式内小幡神社の奥の宮があったところと伝えられています。355メートルほどで、その山の中腹に岩窟があります。

この岩窟の中で、明治31年、寒風が吹きすさぶ旧2月9日、喜三郎は襦袢一枚となって静座し、一週間飲まず食わずの修行をしました。

その様子は、『霊界物語』第1巻に詳細に記されています。

修行によって、天眼通、天耳通、自他心通、天言通、宿命通の大要を心得し、過去・現在・未来に透徹し、現界の出来事などは数百年、数千年の後までことごとく知ることができ、その習得の早さは、「電光石火よりも、すみやかに進歩した」と述べています。

そして、「人を何とも思はず日々を暮してきた自分は、何としたもったいない罰当りであったのか、たとへ仇敵悪人といへども、みな神様の霊が宿ってゐる。人は神である。否（いな）人ばかりではない、一切の動物も植物も、皆われわれのためには必要な力であり、頼みの杖であり、神の断片である」と悟ります。

また、天地の大恩を知るとともに、「衣食住よりも、人間にとって尊く、有難いものは空気である」と悟ります。

さらに、「人と名がつけば、たとへその心は鬼でも蛇（じゃ）でもかまはぬ。大切にしなくてはならぬ」と述べています。

私はここを拝読するたびに、鬼のような、蛇（じゃ）のような人間を本当に大切にできるだろうか、との自問自答にさいなまれます。例えば、殺人犯を許すことができるだろうか。

悪人を悪人として罰し、善人を善人として褒めるのは、人間社会では当たり前のことです。しかし神さまの世界ではそうではありません。

善人はすでに救われており、放っておいても善に向かうけれど、悪人は、放っておいたのではますます浮かばれない、救わねばならない、真っ当な道へ導いてやらねばならない。なぜなら人は「神の子、神の宮」であって、決して鬼でも蛇でもない。魂の根本は善であり、人と名が付けば大切にしなくてはいけないと、王仁三郎聖師は言っているのではないかと思うのです。

たとえ身に幸あらずとも

高熊山での一週間の修行によって、王仁三郎聖師はこの地の上に万民和楽の地上天国を建設するという一大使命を覚悟して、その実現に生涯をささげました。

最後に、王仁三郎聖師の歌を紹介します。

たとへ身に幸あらずとも世のために
尽くす身魂（みたま）となさしめ給へ

これは大本の新年祭で斉唱する讃美歌の一節です。私は、毎年、この讃美歌を奏上するたびに、抵抗を感じます。それは新年早々、とてもこのような心境にはなれないからです。

しかし、王仁三郎聖師は、たとえ身に幸はなくとも、世の多くの人が、一人残らず幸福になることだけをひたすら願っておられたのです。

そうした世の中が早く到来するように、微力を尽くしたいと思う次第です。

掲載文は、平成30年2月21日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・人類愛善会創立記念祭典・市杵島姫命例祭は、6月10日午前10時30分から、斎主・橋本伸作東京宣教センター次長のもと執行され、310人が参拝した。

祭員は埼玉主会が、少年祭員は同主会の池田心音さん、遠藤あかりさん、伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読を大坂泰造東京会長が、添釜は東京主会が担当した。

祭典後、鈴木穎一大本本部長があいさつ。教主さまのご近況として、聖地での苗代始祭や開祖さまのご聖誕の地〝厳の里〟（福知山市）整備事業の起工祭に臨席されたご様子などを報告した。続いて猪子恒東京宣教センター長が、東京本部開設50周年献金のお願いとその用途について説明し、協力を求めた。

引き続いて「人類愛善会活動報告」として、小林龍雄人類愛善会事業化等委員が、世界連邦運動など、世界の恒久平和実現のために活動を続ける人類愛善会活動を報告。また今年3月にタイ王国の首都バンコク市内で開催された「第2回人類愛善会国際ネットワーク国際集会」での、大本青年による英語での世界平和実現に向けての意見発表など、活躍の様子を紹介。人類愛善会活動への理解と海外活動への青年の送り出しを求めた。

その後、能舞台では、東京主会青年部による『霊界物語』役割拝読「震士震商」（第47巻第10章）が奉納された。

『霊界物語』役割拝読「震士震商」（東京主会青年部）

21世紀・生きがい講座

第183回「21世紀・生きがい講座」は、5月16日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、七良浴大吉・京都府合気道連盟副会長が「合気道は世界の架け橋～王仁三郎と植芝盛平～」と題して講話した。参加者は43人（内、一般18人）。

はじめに大本本部制作のビデオ「合気道と大本～植芝盛平翁・綾部で開眼～」を上映。続いて七良浴講師が、「合気道の精神は盛平翁合気道開祖の時代から、地上天国・愛善世界の建設にある」として、大本のみ教えによって花開いた合気道の真髄、盛平翁の生い立ちや大本との出合い、王仁三郎聖師の側近として盛平翁が入蒙に同行したエピソードなどを語った。

参加者からは「盛平翁のお話を通して、王仁三郎聖師の偉大さを改めて学ばせていただきました」（男性・一般）、「講師が実際に植芝開祖を知っている方であり、説得力がありました。他ではなかなか聞くことができない、貴重な内容でした」（男性・一般）、等の声が寄せられた。

東光苑芸術祭

東光苑芸術祭は、5月26日、大本東京本部を会場に開催。関東教区の信徒から募集した作品の展示を始め、信徒有志が日頃の文化芸能活動の成果を披露した。

「展示の部」は講座室を会場に、書や絵画、写真、工芸、手芸、生花、短歌など約60点の作品を展示。「舞台の部」として能舞台では、八雲琴、謡、仕舞、一調一管、武道・和良久、愛善演劇などが奉納された。また茶席・東光庵では薄茶席が設けられ約90人が入席、和やかなひと時を過ごした。

展示の部には、関東教区の信徒から、約60点の芸術作品が寄せられた

東光苑祭典・行事予定

7月

8日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭

14日（土）～16日（月・祝）
東光苑大道場修行

18日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題 霊界がわかれば生き方が変わる
～永遠の世界を見すえて～
講師 宮原雅博（大本特派宣伝使）

8月

7日（火）午前10時30分
開教126年 瑞生大祭遥拝祭

12日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

15日（水）午後7時～8時30分
21世紀生きがい講座（航空会館・新橋）
講題 農は国の大本
～お土の心に学ぶ～
講師 島本光久
㈱酵素の世界社・代表取締役専務）

16日（木）夕拝時
神集祭遥拝（初日・旧7月6日）

22日（水）夕拝時
神集祭遥拝（最終日・旧7月12日）

～大本東京本部開設50周年記念～

東京大本歌祭 献詠歌 募集

10月8日に開催する
東京大本歌祭の献詠歌を募集します

※献詠歌投稿の詳細は「大本」誌6月～8月号をご参照ください

募集 6月20日（水）～8月20日（月）
投稿 1人3首まで
入花料 1、000円
選者 教主さま